

中国古典学の原点

——中国古典学の過去・現在・未来——

中 島 敏 夫

第一章 疑古の流れ

(一)

今日の私の話は、李慶先生著《日本漢学史》について述べることから始めたい。書評執筆のため、私は最近この書を通読させて頂いた。通読してみて、この書は私にとって文字通り「驚くべき、畏るべき書」であった。李慶先生は復旦大学兼金沢大学の教授で、二十余年の歳月をかけ、この書全5冊2700余頁を書き上げ、2010年、上海人民出版社から出版された。ここでの「漢学」とは中国語（「汉学」）で、「中国学」、特にその伝統領域の学「中国古典学」を指している。欧米のシノロジーに相当し、中国では「国学」とも言う。本書は明治維新（1868年）から今日（2010年）に至る142年間の日本の中国学の展開を全面的に叙述した書である。日本の中国学の全領域（歴史学、思想哲学、文学、語学の四領域）において、その通史を、世に始めてしかもただ一人で書き上げるとは私には想像できない事だった。ここに紹介され取り上げられた日本の研究者は565名に上る。この書は過去の日本の中国学（古典中国学）についてその全容を提供してくれるかけがえのない書と言える。

「過去に目を閉ざす者は現在に対しても目を閉ざすことになる」。このドイツ元大統領ワイツゼッカーの言を持ち出すまでもなく、現在の立ち位置を認識し、未来への道を切り開いてこうとすれば、過去の歴史への展望と反省を抜きにしてそれを語ることはできない。政治、学術の区別はない。我々が今日、中国学の未来への展望を語ろうとするなら、先ず、過去を眺めることから始めなければならない。その意味でこの書の持つ意義は大きい。この書と、中国での中国学（その古典学）の展望を踏まえ、本日の話しを進めたい。

(二)

過去をふり返ると、中国古典学研究の流れに大きな二つのテーマが存在するのに気づく。

一つは、古代の歴史は神話から転化したとする疑古の立場の問題である。二つは、所謂「中国観」、つまり中国の歴史的な文化・社会の性質についての見方の問題である。その三として日本における漢字使用についての課題があるが、それは基本的に戦前の段階で幕を引き、戦後の当用漢字として結実している。

李慶《日本漢学史》の章培恒先生の序文にも引用されているが、倉石武四郎先生の《中国文学講話》¹の冒頭に次のような話が載る。これはわたしが学生の時に倉石先生の講義で直かに聞いた講義でもあった。中国史の幕開けに関してで、明治42年の白鳥庫吉(1865～1942)による論争の提起、その所謂「堯舜禹抹殺論」について同書は以下のように述べている。

「今から五十年ほどまえ、わたしが第一高等学校に入学したばかりのこと（大正4年＝1915年頃。引用者中島注）、一年生の東洋史の箭内互先生が、東洋史のはじめに、堯・舜などという帝王たちは実在の人物ではなくて後世のつくり話だと講義された。そのとき、クラスのなかにいた中国の留学生が突然たちあがり、血相かえて“先生！堯舜アリマス”といって抗議したという事件があった。堯と禹と舜で“天・地・人”の思想を擬人化したものだといわれ（白鳥説を指す、引用者注）、それが少壮学者に支持されたわけです。しかし、この学説は当時の漢学者からみますと、“まことにけしからん”というわけである。漢学者先生たちが堯・舜を抹殺されてはとって論議されたのは、ちょうど中国の留学生が“先生！堯舜アリマス”といったのと、ほぼ同じ心境で、今から思うとほほえましい」。

ここでいう「堯舜禹抹殺論」の論争は1909（明治42年）年、白鳥庫吉によって幕が切られて落とされた。白鳥の見解はH. マスペロの影響を受けたともされる。これに林泰輔等が反駁を加えた。さらに橋本増吉・飯島忠夫が白鳥支持、新城新蔵が林支持に加わり、天文学の論争にと発展する。最終的に、前文で見たように白鳥論が大勢を制した。

倉石先生は戦前戦後の生涯を通じて、中国文学を外国語として学び、研究することを主張され、身をもって中国語の教育・研究に当たって来られた。中国文学の研究は、「漢文読み」つまり日本語でもってテキストを考えるのではなく、中国語そのものによってこれを受け止める必要があると説いた。中国という対象をこちら（日本）に引き寄せるのではなく、自分自身をあちら（中国）に投げ入れ、そこに身を置いて考えて、始めて真の姿が見えてくると主張した。そこから、徹底して漢文読みを排斥した。しかし今となって考えれば、江戸時代以来、読み方が漢文訓読しかなかった時代ではそうも言えたが、今つまり中国文学研究において中国語読みが当たり前となった現時点では、漢文訓読を排除しなければならない理由はなくなったとも言えた。漢文訓読は便利で役に立ち、必要である。そういう時代となったのである。前記引用文には漢学者に対する倉石先生の或る種の偏見が表われていたが、時代の流れからすればもっともなことであつた。今日の中国語の広い普及は倉石先生によって基礎が築かれたのである。

漢文学の碩学に、《左氏會箋》（1902 完成）の竹添光鴻（新一郎、井井。1842～1917）、《史記會注考證》（1932～1934 刊）の瀧川資言（龜太郎）がいた。林泰輔（1854～1922 年）は主著《支那上代之研究》、《周公と其時代》がある。竹添の著は杜預《春秋經傳集解》の多くの誤りを修正し、滝川の著は《史記》の三注（宋、裴駰。唐、司馬貞。唐、張守節）に匹敵し、それを補う。林泰輔《國語》国訳漢文大成本の注釈（1922 序）は三国呉の韋昭注を優かに上回る。これら三書は《左傳》《國語》《史記》を現在読むに必要不可欠である。

白鳥はその後半生において日本の文部省で朝鮮半島と旧満州の経略を指導することになる。

（三）

この白鳥の見解は海を隔て中国にも飛び火する。顧頡剛ら所謂《古史辨》（雑誌共七部。1926 年～1941 年）学派的強い疑古の主張の展開である。顧頡剛は、夏の禹はもともと人でなく、蜥蜴（トカゲ）だったの説を展開。中国における疑古派の臺頭であつた。

その衝撃は強烈であつた。顧頡剛はさらに「古代累層加上説」を唱えた。「古代累層加上説」とは、中国の古代史は古くなればなる程、後世によって作り出され、前の説の上に載せられていったとしたのである。この説は大方の賛同を得、中国は言うに及ばず日本・世界を風靡した。世は、倉石先生が述べられた文にも見受けられるように、疑古にあ

らざれば人に非ずといった風潮さえも生じたと言える。「“先生！堯舜アリマス”といったのと、ほぼ同じ心境で、今から思うとほほえましい」という倉石先生の認識は世間一般に常識化していき、学生だった筆者ももちろんそのうちの一人であった。

こうした傾向は顧颉剛の問題提起の前、梁啓超の《中国歴史研究法》（1922年出版）及び《古書真偽及其時代》に既に見られた。梁啓超《中国歴史研究法》は次のように言う²。

偽書で前人が既に考定し鉄案となったものがある。我々はこれについて知っておかぬばならない。そうでなければ、引用して論拠とする場合、無駄骨になってしまう。例えば、『尚書』である。これには、「胤征」なる篇があるが、そこに夏王朝の仲康時の日食のことが出る。最近数十年間、ヨーロッパの学界で論戦の的となった一問題である。異説紛々として十数の説が出、シノロジー学者、専門家の論著により、論争が行われてきている。しかし、これらは、胤征篇が東晉時に出た偽書なることを全く知らずに行っているもので、この事は清朝の閻若璩等により完全に解決を見た定説となっていることである。……欧州人はこの案件についての知識を持ち合わせていないため、喧々諤々と論争しているが、我々から見ると、「笑う可し憐れむ可し」である。これら偽書について知りたければ、清の『四庫全書總目提要』を繙けば概略が分かる。該『提要』中、「真」だと指摘されたものは必ずしも真ではないが、「偽」だと指摘されたものは先ず必ず偽である。このことは学者なるものが必ずや持つべき常識である。

さらに梁啓超《古書真偽及其時代》は言う。これは1927年、北京燕京大学での講義録である³。

偽をなそうとする人は、別人がそれを信じてもらえるように、多く古書を引用しなければならない。例えば『偽古文尚書』である。これは東晉時の人がやったのである。……清儒に『偽古文尚書』の出处を探った人がおり、その老祖をほぼ全て探り当てた。宋儒の二程朱子の学以来、最も大切だと認められてきた十六文字、「人心惟危し、道心惟微なり。惟れ精、惟れ一。允に厥の中を執れ」である。……その出处を尋ねてみると、これは『荀子』解蔽篇と『論語』堯曰篇の数句を寄せ集めてできたものである。解蔽篇は『道經』の「人心之危、道心之微」を引き、堯曰

篇は堯が舜に命じた言葉「允に厥の中を執れ」と述べ、偽造者はこの二カ所の話を一カ所に連結したのである。「之」字を「惟」字に改め、それに「惟れ精、惟れ一」を加えて、そこで十六字の伝心の秘訣ができ上がったのである。最も奇怪な例は『文子』である。これは完全に『淮南子』を剽窃したものである。ほとんど全ての一篇一段、『淮南子』の原文を剽窃してないものはない。ただ篇名を改めているだけである。……まったく言うべき言葉もない。このような書は取るべき価値は一点もないのである。焚書してしまっても惜しくはない。

この梁啓超の論述は、次に来る疑古派の立場を最も典型的に代弁したものとも言え、疑古派の立場はこの言葉に尽きる。

一方、現代の日本でも例えば白川静は禹の原点は新石器時代の仰韶文化半坡遺跡の人面魚体図から起こったとする説を提出しているのが印象に強い。（《中国の神話》⁴）

（四）

疑古の立場、特に「古代累層加上説」は古代文献が偽造されたとする偽書説の上に立って成り立っていた。疑古と偽書説は表裏一体をなしている。多くの古代先秦秦漢期文献はそのほとんどが偽造されたものとされたのである。次の張心澂《偽書通考》（商務印書館 1939／1957 修訂版）を見ればその状況が良く判る。張心澂はそれでも比較的に穏当な部類に入る文献学者である。

經史子集・道藏・佛藏の書籍合計 1105 部。

内、偽とされるもの 809 部。

一部偽の存するもの 280 部。

完全に真なるもの 8 部。

（《詩經》《穆天子傳》《吳郡志》《抱朴子》《公孫龍子》《白虎通義》《後山談叢》《石林志》）

他に、「判定記載なきもの」5、「後人續集有り」2、「不確實」1の8部がある。

偽： 73.2%

一部偽： 25.2%

眞： 0.7%
その他： 0.7%

第二章 疑古との決別

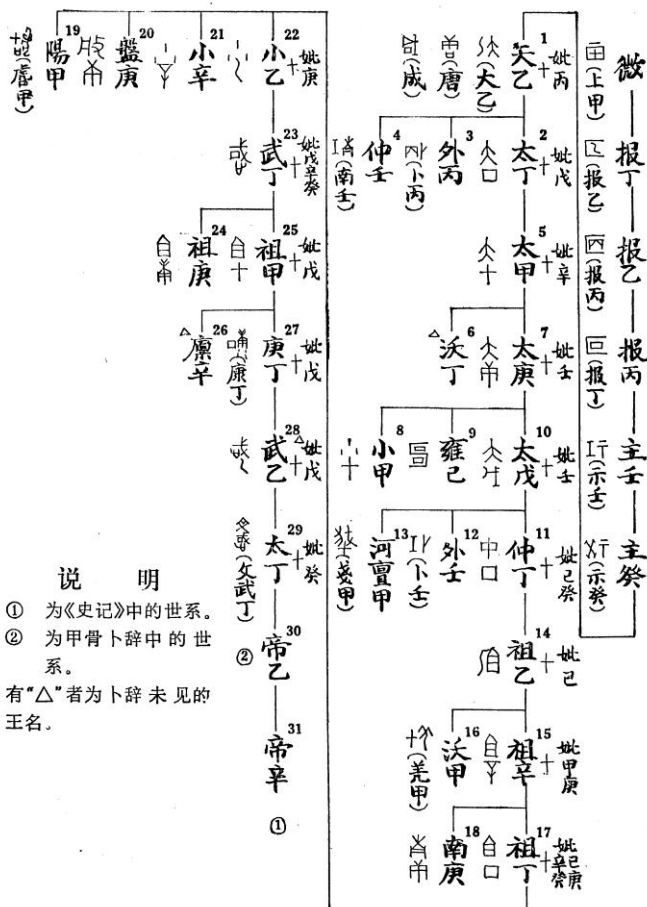
(一)

しかしこの事態がひっくり返る時代が来る。倉石先生が“ほほえましい”と揶揄さえた漢学先生——林泰輔たちの方が正しかったと認められる時代が来るのである。何故か、またどのようにしてか。それは一言で言えば、考古の波が疑古の波を覆したのである。広大な中国全土に涉って大地の下に眠っていた人々の生活・文化——紀元前 6000～2000 の新石器時代、さらに次の夏殷周時代——の跡が掘り起こされ、それが古文獻に述べられた内容に符合し、史実である又は史実に照応すると立証されていった。それはちょうどシュリーマンがトロイを発掘して『イーリアス』が架空の神話ではなく史実の上に成り立ったものだったことを立証したのと軌を一にした。さらには戦国中期から漢代にかけて、疑古派により偽書とされてきた文獻の、その簡帛（簡策と帛書）の実物が次々と出土してきたのである。流れのこうした轉換はまさしくパラダイム・シフト（思考・発想の枠組みの轉換）と言えた。疑古派が「神話から歴史が作られた」とした歴史は実は決して架空の偽作されたものではなく、古文獻はその歴史の史実に照合したものと認められる事態に至ったのである。こうした事態は一度に起こったものではなかった。一つ一つ、事実の発見が重ねられていくという経過があって、大きくその方向に動いていった。こうした経過を、ここで概観し見てみたい。

この流れは、実はその原点は既に遙か以前にあった。甲骨文の発見と殷墟の発掘（1928 開始）である。甲骨文は 1898 年、清末に発見された。甲骨文は基本的に漢字の前身であり、今までに出た甲骨文字の種類数は約五千字。発掘された甲骨文は 10 数万片に上る。衝撃的だったのは王国維の甲骨文解説によって《史記》の殷世系のほとんど全てが甲骨文記載に照応し、正しいものだったと立証されたことであった。参照：図版 1。だとするなら、同じように帝系を述べる《史記》夏本紀もまた史実ではないか。その疑問は当然だった。王国維の斯論（《觀堂集林》所収「卜辭中所見先公先王考」）は 1917 年、国維 40 歳時、甲骨文字出土からわずかに 20 年ほど後に当たる。次いで胡厚宣は 1941 年、甲骨文及び《山

【图版】1 商代世系对照表

孟世凯著《殷墟甲骨文简述》文物出版社 1980, p. 41



海經》、《尚書》堯典に風と風神についての共通する記述を発見した。（《甲骨文四方風名考》）

（二）

私が大学（愛知大学）の教師に赴任した1970年以降、私は授業に際して、恩師の薫陶宜しく時の学術に沿って堯舜禹天神論つまり中国史の始まりは決して古來說かれてきたような三皇五帝に在るのではないと講義してきた。中国文化は全面的に偽作を柱とする論でもあった。私が誤りを犯したというより、中国学が全面的にそうした説を取っていて、それ以外にはあり得ぬという事態だったに過ぎなかった。しかし、その私も徐々に中国での古代史の流れがそれとは違った方向に向かっていることに気づかざるを得なくなっていた。

中華人民共和国成立以後、考古学上の発掘は巨大な成果を生み出した。考古学の発掘の中、中でも我々の記憶に新しい衝撃的な事件は幾つかある。馬王堆の発掘（1972～）。秦の始皇陵兵馬俑の発掘（1974～）、さらに65件の多数の大きな銅鐘を含む曾侯乙墓の発掘（1978～）などであった。さらにまた考古学発掘と共に出土した多数の簡帛の実物の発見があった。

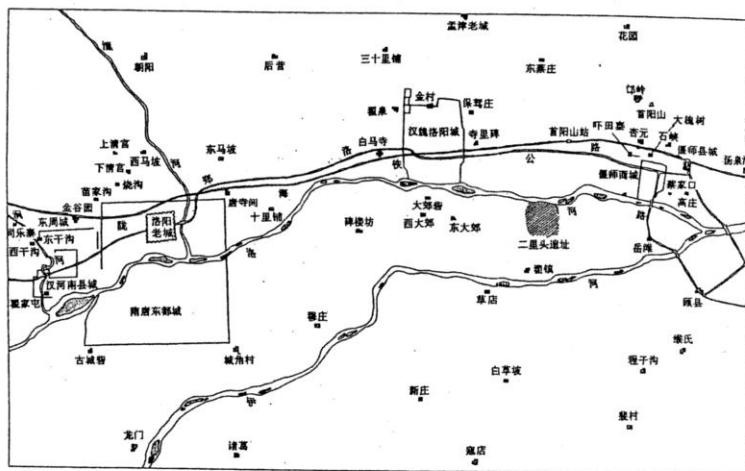
以下、（A）考古学発掘の成果（B）出土した簡帛資料（甲骨文・金文を含む）の二面について簡単に触れる。

（A）先ず、人民共和国成立後に発掘された考古学発掘の成果について見てみる。旧・新石器時代以後の文化遺址の発掘は中国全土で1万箇所に近い。特に新石器時代以後の中国全土に渉る文化は、費孝通によって「中華民族多元一体格局」というコンセプトでもって規定される。⁵以下では、（1）夏文化に相当する二里頭遺址。（2）さらにそれに先立つ陶寺遺址。これは地域的にも時間的にも正しく《尚書》堯舜期に相当する。（3）ついで、商（殷）代の都城の発掘。重点的にこの三点について紹介したい。

（1）【二里頭文化遺址】 参照：図版2～図版3

1959年、徐旭生が古文献記載の地を手がかりにして発掘を指導し、ついに発見に至った文化遺址である。河南偃師県の発掘によって発見され、地名に基づいて二里頭遺址と命名された。まさしく歴史的に夏王朝時代に相当する。シュリーマンのトロイ遺跡発見にも比せられる。二里頭文化の地層は四層に分かれ、放射性同位元素C14の年代測定によれば

【图版】2 二里头遗址位置概略图

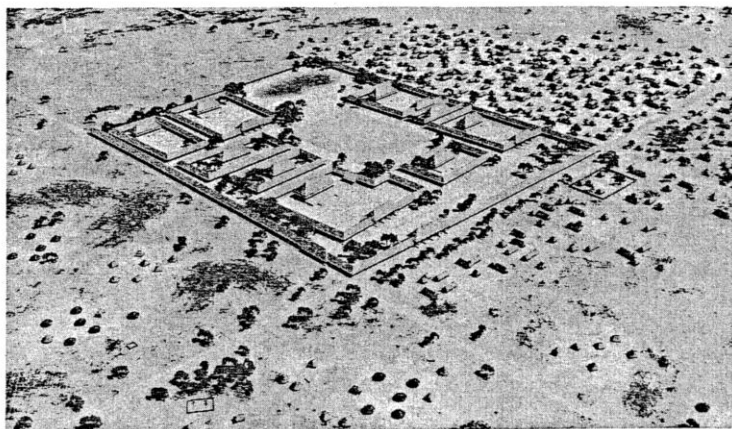


图表3 《二里头遗址位置概略图》

出所：中国社会科学院考古研究所編著『偃师二里头』中国大百科全书出版社、1999年。

【图版】3

二里头文化宫城区遗址（全城）復元图



一期=B.C. 1880～B.C. 1640

二期=B.C. 1740～B.C. 1590

三期=B.C. 1610～B.C. 1564

四期=B.C. 1560～B.C. 1521

(後記《夏商周断代工程報告》⁶を筆者が整理)

どの地層を夏文化とするかには幾つか説があったが、今は全四期が夏文化とする見解が支配的である。二里頭遺址に遅れ、その後半期に当たる東下馮類型を含めて、二里頭文化とされる。

(2) 【陶寺文化遺址】⁷ 参照：図版4～図版7

陶寺の地はまさしく堯舜の都の所在地に相当する地である。《竹書紀年》による堯舜の都「冀」(キ)の地である(ここの冀は後世の冀州と同名異地)。他にも《史記》に「陽城」「安邑」等と出る。地は山西省臨汾の郊外。本格的な発掘は1984年からである。城址の絶対年代はC¹⁴による測年で紀元前2300～前2150の間。貴族の大墓、宮殿址、宗教建築址と祭祀場遺址(天象観測台を備える)がある。古城全体は1800×1500[㏍]。早期小城、中期中城、中期大城の三部分からなる。特記すべきは観象台である。1～10号柱の土柱址があり、柱間の間隙の東2号縫は、長さ1.2[㏍]、幅0.25[㏍]。2003年12月22日の冬至にその間隙から日の出が観測された。英国ストーンヘンジに似る。さらに重大な発見は文字2字(一説に3字)発見である。「文」字と、「堯」字(一説に「易」(=「明」)字、他説に「祖丁」2字とする)。さらに史上最早の銅製の鈴と齒形輪型器(用途不明、織機か)が出土。祭祀朝廷玉具・楽器(鼓・石磬・埙ケン・銅鈴)・土器などは《尚書》虞書に述べられた状況を彷彿とさせる。

(3) 【商王朝城市遺址】

ここでは夏代に次ぐ商代の都城遺址発掘を挙げた。順序は商王朝の年代順に挙げた。

1. 河南登封告城鎮「堰師(告城鎮)商城」遺址(1983年発見) 参照：図版8
2. 鄭州二里崗商城遺址(1950年発見、1952年発掘) 商王朝開国の湯王の都城「亳」(ハク、西亳)か、第11代仲丁の隰(ゴウ=蹕)か。
3. 小双橋遺址。鄭州商城西北約20キロ、(1980年代末発見) 都城の規模があり、一説には鄭州商城の一部か。

4. 安陽洹（エン）水北岸商城（1999 年発見）。第 13 代河亶甲の都、相か。商代中期の第 3 段階のものかとされている。《中国重要考古发现 2002》国家文物局主編 p. 29）
或いは一説に盤庚遷都はこことも言う。
5. 安陽商殷墟遺址（1928 年発掘）（第 20 代盤庚 BC. 1298 年遷都）。

（三）

（B）出土した簡帛資料（甲骨文・金文を含む）

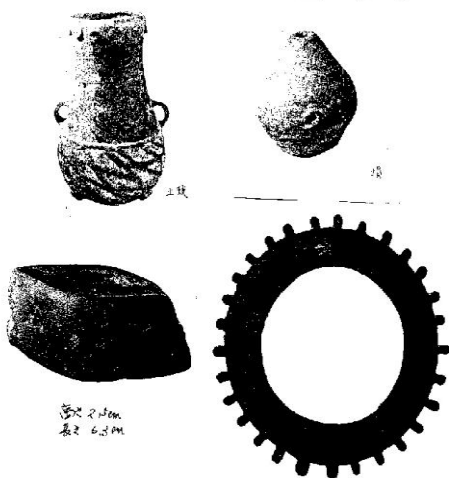
一方、次々と出土した簡帛によって、過去に疑古派によって偽書とされてきた書が次々とその本物が地中から出土した。先に梁啓超が焚書に値するとまで極言した《文子》も漢初のものが出土し、《文子》偽作説は崩れた。《老子》も馬王堆から漢初の甲乙二種の帛書が出た。楚の国の荊門市郭店の楚墓からは三種の《老子》が出土。後者は完本ではない。これは戦国時代（晋の三分 B. C. 475～秦始皇統一 B. C. 221）の中期の偏晩時期（B. C. 310 前後）に当たり、老子老聃の死後およそ 250 年前後だろうか。かつて顧頡剛は《老子》は《呂氏春秋》に書名が見えないので漢初の偽作とした。その他、出土した文献の数はきわめて多い。これら戦国後半から漢初にかけての実物の簡帛の出土によって《禮記》《左傳》《戰國策》《文子》《尉繚子》《孫子》《鶡冠子》《鄧析子》等々の文献を偽とする見解は完全に否定されることになった。

特に最近の重要な出土簡帛（含む甲骨文・金文）の集成に次ぎのものがある。1. 《郭店楚簡竹簡》。2. 《上海博物館藏 戰國楚竹書》。3. 《清華大学簡策》。4. 甲骨文資料。5. 青銅器銘文（金文）資料。以上 5 点について簡述する。

1. 荊門市博物館編《郭店楚簡竹簡》。（1993 年出土）文物出版社 1998 年刊。竹簡（有字）726 枚。「太一生水」「唐虞之道」「緇衣」「性自命出」等の 18 篇。
2. 馬承源主編《上海博物館藏 戰國楚竹書》。全 9 冊。上海古籍出版社（2001～2011. 7）。80 余種の篇。原題を有する篇 20 余篇（「子羔」「恒先」等）。竹簡 1200 枚。字数 3 万 5 千余字。
3. 《清華大学簡策》。略称《清華簡》。2008 年 7 月収納。約 2388 枚竹簡。戦国中晩期のもの。出土状況は不明。「尹至」「保訓」「耆夜」「金縢」「皇門」「祭公」「楚居」等の篇中には《尚書》篇が含まれる。
4. 甲骨文資料

Two views of a dark, textured, irregularly shaped object, possibly a fossil or mineral specimen, against a light background. The object on the left is shown from a side profile, revealing a somewhat elongated, curved shape with a rough, pitted surface. The object on the right is shown from a more frontal or top-down perspective, highlighting a large, irregular opening or cavity on its right side. The overall appearance is that of a weathered or eroded natural material.

外径 12.5mm



中国社会科学院考古研究所、辽宁省博物馆 2012
《考古中华》科学出版社 2012

[illegible]

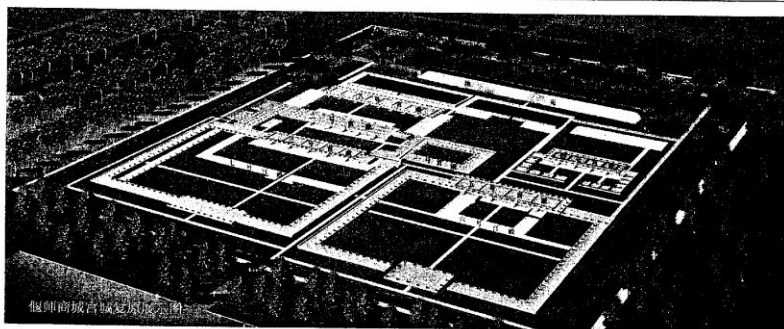
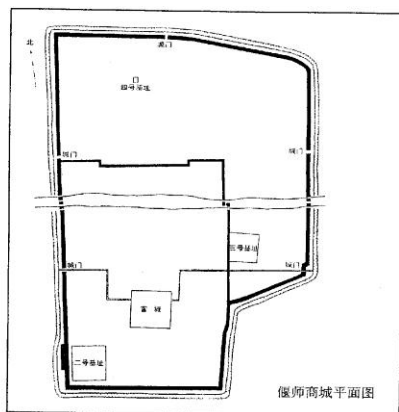
现象台 (由南向北)

【図版】8 堰師商城平面図

最も早期の商（殷）王朝城である。

【図版】2の二里頭遺址地図中の
右（東）端に商城遺址が認められる

中国社会科学院考古研究所、山西博物院編著
《文明的足迹》山西人民出版社 2012



主要なものは《甲骨文合集》全13冊（1979～1983）に編集されている。全39476片、模本2480片。同《補編》も出ている。姚孝遂主編《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》全2冊、中華書局1988年がある。

5. 青銅器銘文（金文）資料

銘文が刻まれた青銅器の数は1万2千を超える。殷商器4450、殷商～西周（待考）600、西周4889、西周～春秋（待考）29、春秋995、春秋～戦国（待考）11、戦国1257。合計12331器。

うち銘文50字以上302器、うち100字以上121器。これだけの数に上ると優に同時史料としての価値を世に問える、堂々と自らの市民権を主張し得る数と言える。張亜初・劉雨撰《西周金文官制研究》によって《周禮》中の官制が金文資料によって実在が立証され、かつて《周禮》が偽書とされた時代は終わった。

周の武王による殷紂王討伐が古文献の記すように甲子の歳（BC. 1046 年）であることがほぼ同時（紂討伐の後 7 日目）資料である「利簋」の銘文（1976 年陝西省臨潼出土）によって裏付けられた。さらには、「遂公盥」⁸は西周中期偏晩のものであり、《尚書》禹貢の始めの部分と全く同一の文が現物資料として登場するとは驚きである。参照：図版 9。

饒宗頤は、最近出土した古文字文献が多数に上るため、王国維の二重証拠法に対し、次の三者による三重証拠法という言い方を提唱している。

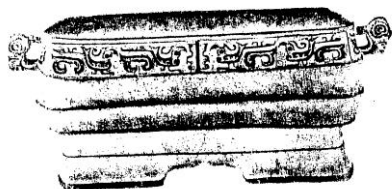
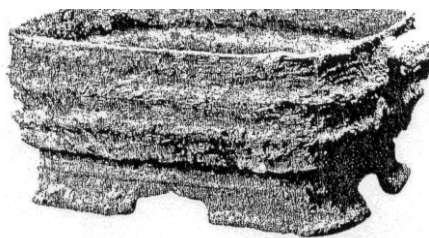
古文献資料

考古出土発掘資料

出土古文字資料（甲骨文、金文、簡策、帛書等資料）

出土古文字資料を二重証拠法の二者と並ぶ部門として独立させねばならない程の大量の出土があるのである。中国学はこれらによって新しい展開を見せること間違いない。

【図版】9. 遂公盥



（上、清理前

下、清理後）



（右、銘文拓本）

(四)

ここで特筆しておかねばならないのは「夏商周断代工程」のことである。夏商周の年代確定という課題解明のため、李学勤の指導の下、200余名の研究者が動員され、人文科学・社会科学と自然科学を結合し、考古学と現代科学の技術を駆使した多学科の学際的な総合的研究が進められた。これが《夏商周断代工程》である。2000年10月、その報告がなされた。それによる夏商周の年代は今の所最も信頼性の高いものとできる。以下がその大枠である。

夏王朝：B.C. 2070年～B.C. 1600年
商の湯王（太乙）伐桀：B.C. 1600年
商王朝：B.C. 1600年～B.C. 1046年
商盤庚の殷遷都：B.C. 1300年
周の武王の伐紂：B.C. 1046年
周王朝：B.C. 1046年以降

第三章. 《尚書》問題

(一)

時代の流れは疑古との決別を果たしたとはいえ、《尚書》は今もなお最も大きい問題を抱えている。

《尚書》は中国歴史上で最も重要な文献の一つである。最も古く、大きい、しかも最も正統的な歴史文献であった。だが、現在でも問題点多いたために、最近の学術界の動向では、歴史学上でも思想史上でも敬遠気味である。だがこれを避けて通るわけにはいかない。きわめて重要な意義を持つ文献である。《尚書》が抱えるその最大の問題は《偽古文尚書》の問題である。

《尚書》《詩經》は古くは《書》《詩》とのみ称した。《尚書》と呼ばれたのは漢初の伏生（伏勝ともいう）の《尚書大傳》以来とされる。その重要性にもかかわらず、最も謎多き文献である。多くの問題を抱えるが、ここではその真偽の問題に絞って話を進めたい。

先秦時期に既に最大に重要視された文献だが、秦の始皇帝の焚書坑儒によって、史上から姿を消す。しかし漢初になって消えた多くの書籍は再び顔を出す。《尚書》もその内の一つである。一本は孔子宅などの壁中から発見された《古文尚書》、一本は《尚書》学者伏生によって伝えられたものを再録した《今文尚書》である。今、ここに二つの《尚書》が世に行われることとなった。今文とは漢代に盛行した隸書の字体を指し、古文は先秦期に秦以外の六国に盛行していた字体である。秦では篆文（大篆・小篆）が行なわれた。漢代は《尚書》に止まらず、広く經学全体においてこの今文の經と古文の經が競合した時代だった。しかし、漢末の戦乱以後この二種の《尚書》は再度姿を消す。そしてここに第三の《尚書》が登場する。四世紀の東晋の元帝（在位 A.D. 317～323）の時に梅賾（バイ・サク）が《古文尚書》があったとして元帝に献上したのである。これが後世に伝えられる《尚書》であり、現在我々が目にする《尚書》もこの梅賾献上になる《尚書》のテキストである。

しかし次第に南宋のころから、この《尚書》中には偽作されたものがあるのではないかの疑いが提出されてくる。最終的には、清朝の《四庫全書總目提要》（1782 年成書）の中でこれら《尚書》篇は偽であると断定される。そこでは、所謂「偽古文《尚書》」篇の偽作であることは閻若璩（1636～1704）によって疑いようもなく証明されたと見なされた。《四庫全書》の持つ権威はきわめて高い。《四庫全書》は康熙帝の命によって編纂され、帝も関与しており、カリスマ性を持つものでもあった。書籍解題であるその《提要》の見解は大きな影響力を持った。その力は今日にまで及んでいると言える。毛奇齡ら、これに反論した人々もいたが、その声は届かなかった。以後、この偽古文《尚書》の偽作説は確立し、鉄の証拠（「鉄証」）ありとまで言われ、今日に至っている。現在までに出了中国の尚書專著、思想史のほとんど全てで偽作説が取られている。日本でも「偽古文を擁護して反駁する学者もいるが、今日偽作を疑う者はいない」（日原利国編『中国思想辞典』1984 年、池田末利執筆⁹⁾）。わたしはこの偽古文《尚書》の真偽について検証を試みてみた。何よりも自らのために欠くことができぬ作業であった。結果は信じることのでない程、驚くべきものだった。「三人言えは虎を成す」（諺）という。居ない虎も、三人が「虎が居る」と言うと、居ることになる。恐ろしいことである。今は真偽が問題となるので、「偽古文」とは呼ばず、《晚書尚書》（「晚書」はおくれて出了書の意）と呼び、その中の偽とされる篇のみを「晚篇」と呼ぶ。

(二)

三種の《尚書》、即ち《今文尚書》、《古文尚書》、東晉に出てきた《晚書尚書》(＝偽古文《尚書》)の篇構成の関連は複雑である。前の二者が既に亡佚し、現在伝わるのは最後の偽古文《尚書》のみである。これを本にして《今文尚書》《古文尚書》が基本的に再構成されている。ここではその偽古文《尚書》を中心にして、《尚書》の篇構成を簡単に説明する。真篇の篇の数え方が異なるためややこしくなっている。それを示せば以下である。

【三種《尚書》、その異なる篇数と篇名】

同一行の左右異なる篇名は、左隣りの同じ一つの篇が分割され、後半部分の名を異にする

《今文尚書》	《古文尚書》	《晚書尚書》
	合計篇数 ＝左隣列の書の篇数＋3 篇	合計篇数 ＝左隣列の書の篇数＋2 篇
堯典	同左	堯典・舜典
皋陶謨	同左	皋陶謨・益稷
盤庚	盤庚上中下 3 篇	同左
顧命	顧命・康王之誥	同左

《晚書尚書》(即ち所謂《偽古文尚書》)は全部で58篇。孔安國作とされる序と傳(注)が付いており、序を入れて59篇である。この序は他の二書にはない。

《今文尚書》は全29篇。《古文尚書》は全58篇。うち、真篇は、《今文尚書》が28篇。《古文尚書》が31篇。亡佚したものは《古文尚書》で泰誓篇1篇。《今文尚書》では亡佚篇27篇(泰誓は上中下、3篇に数える)。

これら三種の《尚書》全篇を分類すると、三類に分けることができる。(A) 真篇。(B) 偽篇とされる篇。(C) 亡佚篇。である。

(A) 真篇。現存する。《晚書尚書》で33篇。《今文尚書》で28篇。《古文尚書》で31篇。数え方の相違で篇数が異なる。上記した。

(B) 偽篇。《晩書尚書》のうち25篇は偽篇とされる。《今文尚書》《古文尚書》と篇名を同じにするが実は偽なるもの(12篇)。《今文尚書》《古文尚書》中には篇名も無い篇(13篇)。二類に分かれる。

うち、9篇は《古文尚書》の亡佚篇と同名。《晩書尚書》の方は偽。泰誓は《今文尚書》《古文尚書》ともに同名で、両者は真で亡佚。それ以外に《晩書尚書》の中には《今文尚書》《古文尚書》には無い篇(偽)13篇がある。

(C) 亡佚篇。《今文尚書》の泰誓1篇は亡。《古文尚書》の27篇は亡佚。うち、九共(9篇)、泰誓は上中下(3篇)に数える。

これらの篇名を以下に示した。

(A) 【真篇】：《晩書尚書》33篇。

(《今文尚書》では28篇、《古文尚書》では31篇に数える。上記した。

() 内のものは後半部分が分割された名。

堯典(舜典)、皐陶謨(益稷)、禹貢、甘誓、湯誓、盤庚(上中下)、高宗彤日、西伯戡黎、微子、牧誓、洪範、金縢、大誥、康誥、酒誥、梓材、召誥、洛誥、多士、無逸、君奭、多方、立政、顧命(康王之誥)、呂刑、文侯之誥、費誓、秦誓

(B) 【偽篇25篇】《晩書尚書》の偽篇とされる25篇(晩篇)は以下(泰誓上中下3篇を含む)

下線を引いた篇□□は《古文尚書》中の真篇と同名であるが、偽とされる(9篇)。《古文尚書》中の同名篇は亡佚。他に《今文尚書》中に泰誓1篇(篇名は同じ)があったが同じく亡佚。

大禹謨、五子之歌、胤征、仲虺之誥、湯誥、伊訓、太甲(上中下)、咸有一德、說命(上中下)、泰誓(上中下)、武成、旅獒、微子之命、蔡仲之命、周官、君陳、畢命、君牙、冏命

(C) 【亡佚篇15篇】

(＝真篇)。《今文尚書》《古文尚書》に有ったもので現在は無くなった篇。
《晚書尚書》中に同名の9篇が現存するが、それは実は偽。その真篇の亡佚
9篇（上記で下線引く篇）はここでは挙げていないが、これらも亡佚篇に入
る。また、またこの舜典は真篇で、それは亡佚したとされる。上に記した
堯典の後半を分けた舜典とは別ものとされている。

舜典、汨作、九共（9篇）、棄稷、典寶、肆命、原命

(三)

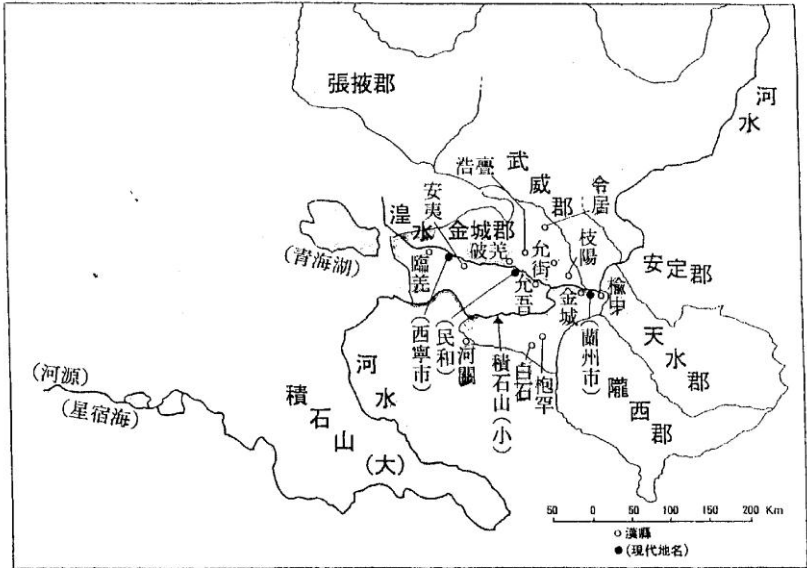
ここでは偽とされる代表的なものについて検証してみた。その一つは所謂「偽孔傳」（《禹貢》の積石山の傳）であり、二つは偽とされる「大禹謨」篇である。ここでは前者、《禹貢》中の「積石（山）」に付けられた孔安國の傳（＝注）について検証した結果を述べる。

《尚書》禹貢の「浮于積石，至於龍門西河（積石に浮かび、龍門・西河に至る）」の「積石」に孔安國が傳（＝注）をつけ、「積石山在金城西南，河所經也（積石山は金城の西南に在り。河（黄河）の經る所なり）」と記す。その金城の地名は孔安國の生存中には存在しない、従って、この傳は孔安國が付けたものではなく偽作だとするのが閻若璩の論旨である。

清の《四庫全書總目提要》（1782年成書）は「漢昭帝の始元六年に始めて金城郡を置き、孔傳乃ち云う“積石山は金城西南に在り”と。孔安國は漢武帝時に卒し、載は史記に在り、則ち司馬遷以前に在り。安んぞ此の地名を知るを得ん乎。其の依託たること、尤（とく）に佐證顯然たり」と言う（梅鷟《尚書考異》條）。その他、《尚書正義》條に「（從來は）見聞較（やや）狭く、搜采未だ周（あまねか）ならず。若璩に至りて乃ち經を引き古に據り、一一其の矛盾之故を陳ぶ。古文之偽、乃ち大いに明らかなる」と言う。また閻若璩《尚書古文疏證》條に「孔傳之依託たること、朱子以來、遞（つぎつぎ）と論辯有り。國朝（清朝）の閻若璩に至りて《尚書古文疏證》を作り、其の事愈（いよ）いよ明かなり。……“積石山在金城西南羌中”の一條を攻む。皆地名は安國の後に在り」と述べる。

金城郡は確かに前漢、昭帝の始元六年（B.C. 81）に設置された郡である。《漢書》昭帝紀の始元六年に「以邊塞闊遠，取天水、隴西、張掖郡各二縣，置金城郡。（邊塞の闊遠なるを以て天水・隴西・張掖の郡、各二縣を取りて、金城郡を置く。）」とある。

【図版】10 地図 前漢、金城郡・積石山地図



鈔自譚其驤主編《中國歷史地圖集》 (地圖出版社 1982)
第二冊、西漢時期・涼州刺史部

中島作成

では、閻若璩のこの主張は正しいのであろうか。郡は確かに昭帝元始六年の設置である。だが、それ以前に「金城」はなかったのだろうか。いや在るのである。《史記》大宛列傳に「金城」の名が出る。その記事に「其明年(元狩二年)，渾邪王率其民降漢，而金城、河西西並南山至鹽澤空無匈奴。」(其の明年、渾邪王、其の民を率いて漢に降る。金城、河西より西のかた南山に並(そい)て鹽澤に至るまで空(クウ)にして匈奴無し)と記されている。

この金城記事は元狩二年 (B. C. 121) の記事であり、金城郡設置の昭帝の始元六年 (B. C. 81) の 40 年前に当たる。従って、金城郡設置の前に金城の地名はないとする閻若璩の主張は成り立たない。しかし、閻若璩はその《史記》大宛列傳記事は「史の追記」だと

し、金城郡設置以前には金城の地名はないとする。金城郡設置はむしろ司馬遷死後のことであり、司馬遷が《史記》のその文を追記することはあり得ない。

問題の焦点はこの《史記》大宛列傳中の金城の地名が追記か否かである。閻若璩がその根拠とするのは、後漢末の張衡の記事（《漢官儀》文）に「城を築いた時に金が手に入ったから金城郡という」とあり、だから、金城の名はこれ以前にはなかったと主張する。また、この《史記》大宛列傳記事は宋の司馬光《資治通鑑》（成書 1084 年）中にそのまま引用されている。だが、それに対して元代の胡三省は注をつけ「史の追記」だとしており、閻氏はこの胡三省注を引き《史記》大宛列傳の「金城」は「史の追述」だとしているのである。実は《史記》には、この大宛列傳と同じ匈奴との戦いを記すものが大宛列傳以外にも衛青霍去病列傳、匈奴列傳にある（但し「金城」地名は大宛列傳のみ）。また《漢書》張騫傳にも《史記》大宛列傳と同じ金城記事が出る。司馬光は大宛列傳をそのまま記すが、胡三省は大宛列傳記事を見落として《資治通鑑》を追記だと誤認したのである。《史記》大宛列傳、《漢書》張騫傳、《資治通鑑》元狩二年記事及び胡三省注、並びに関係する人物の年表を参照：図版 11。《史記》の 1200 年後の《資治通鑑》とその注を持ち出し、《史記》の金城記事が追記だとするのは論外である。また閻氏は應劭伝聞にもとづき、金城は郡設置以前にあり得ぬとするが、これも應劭の伝聞記事を絶対視することはできない。《漢書》地理志は金城郡下に 13 縣を挙げる。うち 2 縣（破羌縣、允街縣）は郡設置以後の追加設置（宣帝神爵二年=B.C. 60）で、郡設置時には 11 縣あった。その中に金城縣がある。金城の郡治（郡役所設置場所）は允吾縣に置かれた。これは閻氏も認める。（《水經注》による）。一方、金城縣は現蘭州市（金城郡の東端の地）にあった。参照：図版 10 地図。築城時に金が取れたからその名ありとするが、では、金が取れたのは允吾縣築城時か、金城縣築城時か、ということにもなるだろう。

《漢書》地理志の金城郡についての唐・顔師古の見解では、金城の名の由来は城の堅固によるものである。先秦から漢にかけての「金城」の一般用例はそうである。或いは、地が西であるためとする（西の色は金色）。金が取れたためとする説は取らない。應劭見解は伝聞であり、これを絶対視することはできない。これをもとに、縣ではあり得ず、郡だとして郡設置以前に金城はないとする閻氏見解は成り立ち得ない。現に《漢書》張騫傳中にも《史記》の大宛列傳の元狩二年記事をほぼそのまま引用する。閻氏によればこの《漢書》記事も追記ということになるのか。考えられないことである。

〔《史記》《漢書》《資治通鑑》「金城」関係文〕&「関連人物年表」

《史記》

塞以校尉從大將軍擊匈奴，知水草處，軍得以不乏，乃封塞爲博望侯。(一)是歲元朔六年也。其明年，塞爲衛尉，與李將軍俱出右北平擊匈奴。匈奴圍李將軍，軍失亡多；而塞後期當斬，贖爲庶人。是歲漢遣驃騎破匈奴西(二)城數萬人至祁連山。其明年，漢郡王率其民降漢，而金城、河西西並南山至鹽澤空無匈奴。匈奴時有候者到，而希矣。其後二年，漢擊走單于於幕北。

大宛列傳第六十三

三六七

《漢書》

張騫李廣利傳第三十一

二六九

塞以校尉從大將軍擊匈奴，知水草處，軍得以不乏，乃封塞爲博望侯。(一)是歲元朔六年也。後二年，塞爲衛尉，與李廣俱出右北平擊匈奴。匈奴圍李將軍，軍失亡多，而塞後期當斬，贖爲庶人。是歲驃騎將軍破匈奴西邊，殺數萬人，至祁連山。其秋，漢郡王率衆降漢，而金城、河西西並南山至鹽澤空無匈奴。(二)匈奴時有候者到，而希矣。後二年，漢擊走單于於幕北。

《資治通鑑》卷十九 漢紀十一 武帝元狩二年(前121)

六二四

居頃之，乃分徙降者邊五郡故塞外，而皆在河南，因其故俗爲五屬國。五郡，謂隴西、北地、上郡、朔方、雲中也。故塞，塞之先與匈奴所關之塞。自塞使漢臣導匈奴地而邊關益斥，塞、頃之節，置順南使，與中國關於故塞。及衛青收河南，而邊關復蒙恬之舊。所謂故塞外，其地在北河之南也。師古曰：凡言屬國，存其國號而屬漢朝，故曰屬國。史記正義曰：以塞降之民徙置五郡，各依本國之俗而屬於漢，故曰屬國。而金城、河西，河水出金城，河關縣西南塞外磧石山，東流逕金城郡界。自允吾以西，通謂之金城河。渡河而西，則武威等四郡之地。然金城郡昭帝始元六年方置，史遺也。西並南山至鹽澤，空無匈奴，並步浪翻。匈奴時有候者到而希矣。

表 〔關係人物の元狩二年(BC.121)時の年齢等〕

人物	生年	元狩二年 (B.C.121)年齢	卒年	元狩二年後、卒年までの年
武帝	B.C.156	36歳	B.C.87	34年後死亡
張騫	?	?	B.C.114	7年後死亡
霍去病(驃騎將軍)	B.C.140	20歳	B.C.117	4年後死亡
衛青(大將軍)	B.C.151	31歳	B.C.106	15年後死亡
司馬遷	一説B.C.145 一説B.C.135	25歳(推定) 15歳(推定)	? BC.99生存確実	22年後(B.C.99李陵事件)生存確実
孔安國	?	? (司馬遷より弱年)	? BC.91生存確実	30年後(B.C.91巫蠱事件)生存確実

昭帝、始元六年はB.C.81年 元狩二年の40年後

《漢書》昭帝紀に「辺塞が広く遠いので天水・隴西・張掖郡から各二縣を取って金城郡を置いた」とし、これによると、金城郡の縣は計6縣になり、地理志の郡設置時11縣との整合性が問題になる。卑見では、金城郡の郡の中央部に武威郡があり、その5縣を主体として金城郡を作り、その際に隣の天水・隴西・張掖郡から各2縣合計6縣を併せたのではないかと推測する。こう取ると矛盾は避けられる。

さらにまた、閻氏は地理上の位置関係から金城は郡でしかあり得ぬとする。だがこれも誤りである。積石山には大小の積石山があり、小積石山は黄河に沿う積石峽にある。大は今のアムネマチン山脈で大山脈である。《禹貢》の積石山は黄河に沿い、小積石山である。これは正しく蘭州市の西南約130キロに当たる。この論の詳細は拙論¹⁰に述べる。参照されたい。閻若璩の学術水準は、ここから見る限り、きわめて低い。しかもその低さは、上に見たように信じがたいほどである。彼の偽古文《尚書》説はまちがいに裸の王様と言える。

(四)

次ぎに偽篇とされる〈大禹謨〉篇の問題に簡単に触れよう。この問題も拙論で詳述している。¹¹ 先ず現在の日本の年号として採用されている年号「平成」は《尚書》中の偽古文《尚書》である〈大禹謨〉篇中のことばである。《尚書》学で広く偽作とされている篇である。

「平成」なる語は実は《左傳》の文公18年(BC. 609年)に出ることばである。「堯不能舉，舜臣堯，舉八愷，使主后土，以揆百事，莫不時序，地平天成。」(堯、(臣下を)舉ぐる能わず。舜、堯に臣たり、八愷(ハチガイ)を挙げ、后土を主(つかさ)どり、以て百事を揆(はか)ら使め、時序あらざるは莫なく、地平天成(地平らにして天成る)とある。偽古文《尚書》説によると、これら先秦期の經典のことばを寄せ集めて来て偽古文篇が偽作されたとされているのである。この〈大禹謨〉篇の中心をなす語は「人心惟危，道心惟微，惟精惟一，允執厥中」＝「人心惟(こ)れ危うし，道心惟(こ)れ微なり，惟(こ)れ精、惟(こ)れ一，允(まこと)に厥(そ)の中を執れ」＝の所謂「人心」十六字である。この句をめぐって閻若璩はその偽作説を展開し、そこから〈大禹謨〉篇全体を偽とする。しかしわたしの考察したところでは閻論は先ず100%成りたない。ここでは詳述する余裕がない。注記した拙論を参照して頂きたい。

第四章 中国古典学の原点、過去・現在・未来

(一) 中国史と中国文明の始まり

中国の歴史をどう受け止めるか。そのパラダイムは、信古から疑古へ、疑古から積古（考古）へと大きく変わってきた。ただしこれには注釈を要する。先ず「信古」といっても、孟子のことに「《尚書》のすべてを信じるなら《尚書》など無い方がよい」（「盡信書、則不如無書。」《孟子》盡心下）とある。既に先秦の世にあって古代の書をすべて信じるわけにはいかないと孟子は言う。古代をもって完全に信古の時代とするわけにはいかない。次に「疑古」という。だが実体は「疑う」ということではなく、古代を丸ごと「否定」するものだった。さらに現在と将来を「積古」とするか「考古」とするか。「考古」には「考古学」なるものがあって大きな役割を果たしている、それとの混同を避けるため「積古」が選ばれる。語は多義的であり、単に「解釈する」というより、本来的な「考察する」の意「考古」としたいところである。

では、中国の歴史は何時から始まったか。夏の禹を神話から成り立ったとした疑古派の立場は崩壊した。疑古派が先ず夏の禹を打倒の対象に取り上げたのは、或る意味で的を射ていた。禹さえ倒れれば後（すなわちそれ以前の帝王）はドミノのように倒れるからである。実際に三皇、五帝は全て打倒されたのである。

「歴史」の語は多義的である。人類の登場しない時の歴史（宇宙・地球・生物の歴史）も書かれるが、それは「歴史」の語の一義的な意味ではない。「史」なる語は一義的には史官を指し、また史官の記す同時記録性を持つ歴史記載を指す。では、現存する文献ではそれはどれか。おそらくその種の歴史文献は亡失しているのであろう。現存する文献としては《尚書》が最古である。その《尚書》中、どの篇が最古の歴史記載なのか。論議のある所だが、一説に甘誓篇とし、一説に盤庚篇とする。

一方、中国の文明は何時始まったのか。中国歴史の起源と文明の起源とを無条件的に同一視することはできない。一般に、文明は、歴史的に、城市・青銅器等の金属器・文字の出現に求められる。しかしこれら三者はおそらく国家の誕生に結びつき、そこに統合されるものなのであろう。

《史記》はその始まりを五帝中の黄帝に置いた。疑古派は黄帝の黄色は五行思想に由来するものであり、五行思想は齊の鄒衍によるものであり、黄帝は戦国時代後半に出てき

たとした。しかし、黄帝は《逸周書》《國語》《左傳》《山海經》に既に出ているが、疑古派はそれを偽だとしたのである。

禹に始まる夏王朝は、それまでの所謂「禪讓制」に変わり、「世襲制」となったとされている。ただ《史記》によれば、禹は臣下の益に帝位を譲り、益が禹の子啓に譲ったと言う。その啓が帝位に即き、世襲制が始まったのである。ここに中国最初の王朝夏王朝が成立する。国家は完全に成立していたと取ってよいのであろうが、それ以前に国家は成立していたのか否か。

考古学の成果によると、今を遡る 6000 年前の河南濮陽西水坡遺址に一人の遺骨の両横に貝殻の龍と虎の像を配した墓が出土している。参照：図版 1 2。この人物は帝王にも比せられる権力を保持していたかとも伺われる。国家が成立する遙か以前である。広く中国では王朝国家成立以前に「酋邦」時期というコンセプトを使用する。確かに段階的な過程が存在するにちがいない。仰韶文化期の半坡遺址（7000～6000 年前）と姜寨遺址（5000 年前）との発掘状況を見ると、まだ文明期には遠い。だが新石器時代の龍山文化時期に至ると、各地に城寨遺址が登場して来る。こうした過程を経て陶寺遺址に至るのである。陶寺の観象台は陶寺文化遺址の中期のものである。B.C. 2100 年前後（4100～4000 年前）とされている。これは《尚書》堯典記事の内容にほぼ照応していると言える。黄帝期は、その考古学発掘と古文獻記載の照応関係は推測されはするが、厳密な意味での立証はまだない。

（二）様々な原点——人類の起源、中国人の起源

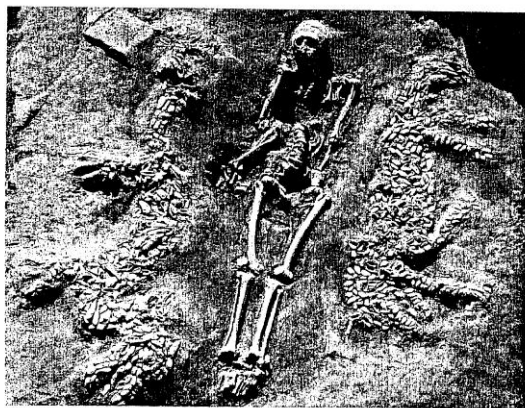
原点の持つ意味は大きい。個体発生は種の発生を繰り返すというが、それはフラクタルな構造、つまり全体がその部分の中に埋め込まれ、その部分がそのまた下の部分に対して全体となって埋め込まれていくという構造である。それは生物界に止まらない。古い本質が新しい体質の奥深い底に潜みこんで、表面から深みへと沈みこむのである。

その本質的な体質を読み取ろうとすると、どうしても原点への回帰が求められる。ついで、変化の局面がどこでどう起こったかが次ぎの焦点になる。

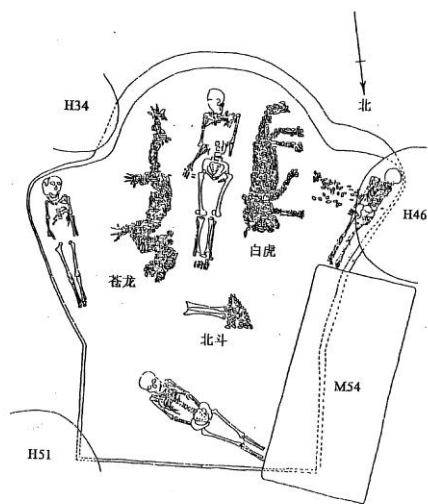
中国史は従来、最古のヒトとして雲南の元謀人が挙げられてきた。元謀人は雲南省元謀県で発見（1965 年）。人の門歯で 170 万年前のものとされている。最近 1985 年、巫山人（四川省）が発見されて中国最古の人類は修正された。巫山人は 204 万年前とされる。元謀も巫山も長江流域である。

【图版】 12

濮阳西水坡新石器遗址出土遗骨&龙虎像



9. 濮阳西水坡遗址出土的蚌砌龙虎图案



河南文物考古研究所、濮阳市文物保护管理所
南海森主编《濮阳西水坡》中州古籍出版社 2012

また人類の起源について、ミトコンドリア遺伝子による人類起源の推測が行われ始めた。ミトコンドリアはヒトの遺伝子の一種で、男性の精子が女性の体内に入った時に死滅する遺伝子である。そのため女系のみにその遺伝子は伝えられる。これをたどると、女系の系統が一本の筋となってどこまでも辿っていけるという。スティーブン・オッペンハイマー『人類の足跡10万年全史』¹²によると、世界の全地域の現代人52個体（中国人の南北の2体を含む）のミトコンドリアは最終的にアフリカの19万年前のミトコンドリア・イヴにたどり着く。参照：図版13。検体数はこれで充分なのか、歴史的な古人類の検体ではどうなのか。他の専門家の意見も聞きたい所である。

中国人類学上、体質的に南北モンゴロイドの別があるとされた古人類は、北京原人などを経て、さらに先秦期の華夏族・四夷（東夷・北狄・西戎・南蛮）へ、さらに春秋期には戎に七戎の別、狄に三狄の別、夷に萊・介・根牟、百濮の夷。蠻に羣蠻が《左傳》に出る。さらに漢代以降、変貌を遂げ、現在は、漢民族を中心とする56の多民族国家である。そうなっていく過程は如何なるものだったのか。まだまだ十分に明確にされた過程とはいえない。

（三）中国史の流れと中国観

「疑古の除染」は始まったばかりである。疑古の広がりには全面的でさえある。そのあらゆる領域に於ける疑古の除染は容易ではない。だが、今から、あらゆる面に於ける具体的個別の問題での再検討が求められているのである。李慶の書の歴史的なテーマその二は、中国観すなわち中国の歴史的な文化・社会の性質に対する見方であった。これには中国社会の本質、中国史時代区分の問題、中国社会停滞論、中国近代資本主義の萌芽問題、等々の形を取ってきたが、皆の納得いく結論は得られていない。中国史時代区分問題での日本中国の間、及び中国内部の学者間の相違は著しい。従来、歴史学上、「封建制度」と中国古来の「封建」とは異なるとされ、中国古来の「封建」はヨーロッパの封建制度（奴隸制ではなく農奴制を基礎とする制度）とは異なるとして中国の「封建」に対しては「分封」という言い方を用いる。奴隸制と農奴制。これが中国で如何に展開したかはきわめて難しい問いである。とどのつまり、中国には欧米と異なった、中国に見合った観点で解する以外にないとする反省が生まれた。中国の奴隸制・封建制を含め、その文化を西方の観点でのみ見るのは誤りである。欧米と中国の観点、その両者の総合の上に答えが出るのであろう。

スティーブン・オッペンハイマー著『人類の足跡10万年全史』

[illegible]

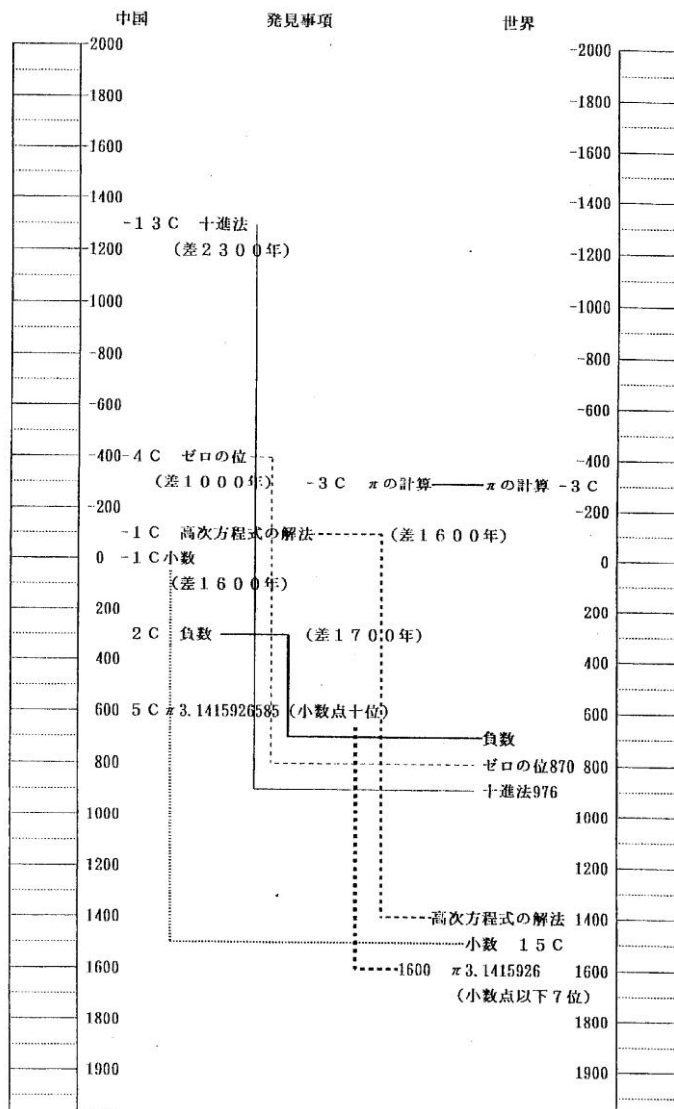
【図版】14 中国世界、古代科学対照年表

中国・世界 科学技術発見対照年表

『図説・中国の科学と文明』

ロバート・K・G・テンブル

河出書房新社1992 牛山郵代訳



“ニーダムの難問”とされる課題、つまり、中国の歴史的な展開の過程で何故資本主義が成立しなかったのか。また中国の近代に何故科学は興り得なかったのか。これに対する答えでも、皆の納得いく答えは出ていない。ニーダムの場合、その問いは、遡って古く中国が高い科学技術を有していたにも関わらず、近代では振るわないのは何故かと問いかけているのである。中国の科学的な発見が世界の中でどういう位置を占めているか。これに関するニーダムの分析はきわめて興味深い。ここで紹介する余裕はないが、ロバート・テンプル『図説・中国の科学と文明』が分かりやすく紹介している。ここでそれを私が表としたものを掲げた。参照：図版14。

今後、中国学全体において、時間軸の中での現在の立脚点を明らかにすること、空間軸つまりグローバルな軸における中国文明・文化の立ち位置を明らかにすること。これがますます求められるだろう。

名古屋大学の加藤國安先生から今回の講演会に際してあらゆる面での援助を頂いた。もともと一年半前に東京大学の中国文学科で「疑古との決別」なる題で講演をした。加藤先生からはその時の内容でよいからというお話だったが、わたしとしては、今回の講演に際して全面的に手を入れた。本日の講演は不十分な点多々あること、これは本人が一番よく知っている。問題は多岐にわたる。今後ともに皆さんとともに解明に努めていきたいと考えている。加藤國安先生に心から感謝の意を表したい。

本講演会は名古屋大学大学院文学研究科・愛知大学共同主催でもって2013年7月6日、「中部地区中国文学交流会」として開催された。全体のテーマを『中国文学史の変化の局面』とし、愛知大学名古屋校舎において催された。中島敏夫担当の本講演では内容が多岐に涉ったのでその一部を省略して話した。資料の図版80葉を附し、図版を中心に話を進めた。本紀要掲載稿では紙幅の関係から多くの図版を省略し、掲載した図版は14点に止めた。了とされたい。(2013.7.6講演。2013.8.29稿提出)

注

- ¹ : 岩波新書『中国文学講話』1968年 p. 1。
- ² : 梁啓超『中国歴史研究法』台灣商務印書館影印版 1966年 p. 127。
- ³ : 梁啓超『古書眞偽及其年代』。中華書局 1936年版、p. 48。
- ⁴ : 『中国の神話』中央公論社 1975年 p. 63。
- ⁵ : 費孝通等著《中华民族多元一体格局》中央民族学院出版社 1989。
費孝通主編《中华民族多元一体格局》(修訂版)、同上出版社 1999。
- ⁶ : 夏商周斷代工程专家组《夏商周斷代工程 1996～2000 年阶段成果报告》、世界图书出版公司 2000 年 10 月。
- ⁷ : 《考古》2004. 7 期。
宋健忠著《发现中国陶寺考古与华夏文明之根》山西人民出版社 2006. 6 による。
- ⁸ : 饒宗頤主編《華學》第 6 輯 2003 年。紫禁城出版社。扉所掲
- ⁹ : 日原利国編『中国思想辞典』研文出版 1984 年「尚書古文疏證」項執筆池田未利。
- ¹⁰ : 「金城考」(中文版)《中日学者中国学論文集——中島敏夫教授漢学研究五十年志念文集》復旦大学出版社 2006. 10 刊所掲。
「金城攷」『松浦友久博士追悼記念、中國古典文學論集』(同上日文要約版)、研文出版 2006. 3 刊。
- ¹¹ : 「『尚書』〈大禹謨〉「人心」十六字偽作説について」(1)～(4)『文明 21』愛知大学国際コミュニケーション学会紀要第 15 号～第 18 号、2005 年～2006 年、所掲。
同上『中国關係論説資料』第 1 分冊(哲学宗教文化)第 50 号～51 号(平成 20 年分～21 年分)所引。
- ¹² : スティーブン・オッペンハイマー『人類の足跡 10 万年全史』仲村明子訳、草思社 2007、p. 61。